

浄土

monthly
JŌDO

2013
June

6



2013
年『浄土』表紙の人

佐野芳朗



佐野 芳朗（さの よしろう）

走馬灯に手を翳しながら…

1939年愛知県は尾張瀬戸市、瀬戸焼の町に手打うどん屋の次男として生を受ける。瀬戸窯業の工芸を専攻、ノベリティーデザイナーに就く。

1962年上京、グラフィックデザインを学ぶ。

傍ら岡本太郎のアトリエで「かの子文学碑」ほかモニュメント製作に参加。

二科展デザイン賞、パフォーマンスとして「1000円作品展」活動 等。本邦初の「ボランティア」誌 40数年間製作。

全日本ろうあ連盟「絵で学ぶ手話」連作。

同時期、正力松太郎氏提唱の-全国青少年教化協議会-「おしえの泉」「ぴっばら」等の製作に協力。

最近は機関誌『浄土』にお招きをお受けております。

淀みの川を流れつ…

合掌

東京・八王子

長圓寺

寺に歴史あり
人々に信仰あり
日本の
心の故郷を紀行する

寺院紀行



東京・八王子の大楽寺町にある
照念山月崇院長圓寺の本堂。



平成25年4月6日、長圓寺第31世長谷川次應住職は大本山増上寺御忌日中法要唱導師を勤められた。写真は増上寺本堂で、本尊阿彌陀如来坐像、法然上人像の前に立てられているのが長谷川住職。

八王子
長圓寺

長圓寺本尊阿彌陀如来立像。



長圓寺本堂の内陣。



御忌唱導師を無事務め終えての親族記念写真。

本堂前での庭儀式。長谷川唱導師は落着かされていた。



御忌の練り行列、長谷川唱導師の上に朱色の傘がさされている。



受付役を引き受けてくれた、長圓寺と同じ八王子組の御寺院方々。



増上寺本尊阿彌陀如来と法然上人を前にして歎徳疏を読み上げる長谷川唱導師。



八王子には数少ない閻魔堂。このお堂の脇に長圓寺の目印となる大杉が一本立っていたが、古木となり昨年切り倒された。



織物の町八王子に残る養蚕の神である馬鳴菩薩が長圓寺に祀られている。



閻魔堂に祀られている閻魔像と十王像。

長圓寺開山の讃養牛秀名が刻まれている石塔。



長圓寺歴代住職の墓。

浄土

2013/6月号 目次

カラーグラビア寺院紀行 東京・八王子 長圓寺 ……写真＝タカオカ邦彦	1
法然上人と聖女テレゼ、 そしてマザー・テレサ ……インタビュー 石丸晶子	2
寺院紀行 東京・八王子 長圓寺 ……真山 剛	12
会いたい人 仲代達矢さん 上 ……関 容子	20
響流十方 ……林田康順	30
連載小説 渡辺海旭 ……前田和男	34
江戸を歩く ……森 清鑑	42
誌上句会 ……選者＝増田河郎子	48
マンガ さっちゃんはネッ ……かまちよしろう	51
編集後記 ……	52
表紙・表紙裏＝2013「浄土」表紙の人 佐野芳朗	
背表紙裏＝泰雲の美味探訪	



表紙題字＝中村康隆元浄土門主
アートディレクション＝近藤十四郎
協力＝迦陵頻伽舎

石丸晶子

インタビュー
《後編》

聞き手 ● 本誌編集チーフ 長谷川岱潤

法然上人と

聖女テレゼ、

そして

マザー・テレサ

マザーテレサと法然上人

長谷川 それから、先生にお書きいただいた、「私が感じる法然上人」というお原稿の中に、先生が、「もし現代に法然上人がいらしたらと想像すると、私は信仰深い宗教家というよりも、もっと社会的運動をする、マザー・テレサのような存在が、どうしても思いつくかぶ」というような文章があったのですが、どういう意味だったのでしょうか。

石丸 マザー・テレサは、インドのカルカッタで、「死を待つ人の家」というのをつくっておられたのです。

カルカッタというのは、すごく貧しいところです。それで、たくさん病氣の人たちが毎日、何十人、何百人と運び込まれてきて、そこで死んでいくわけです。

そういう社会福祉の施設をおつくりになっていたのですが、マザー・テレサは、非常に熱心なカトリックのシスターで、カトリックの信仰に一身を捧げた方なんです。

しかしそこにくる人々は、カトリックでないとか、キリスト教の洗礼を受けていないとかだめだとかいうことは全くなくて、イスラム教徒には、イスラム教の先生を呼び、プロテスタントの人にはプロテスタントの牧師さんと呼び、仏教徒にはお坊さまをお呼びして、全く宗教というものに対して差別しなかったのです。

ただ人として見て、その人が仏教を信じていれば、その人の心の安らぎのために、仏教のお坊さまを招いて、いろいろ臨終の慰めの言葉をかけるようにされていたわけです。

長谷川 それはすごいですね。

石丸 それでお葬式は、カトリックではなくて、仏教であげて、極楽浄土に行かれるようにお見送りする。

イスラム教徒の人なら、イスラム教の先生を呼んで、お慰めして、臨終を迎えさせて、イスラム教のお葬式をあげさせた。そこに、マザー・テレサも出席する。

私は、そこに、普遍に至り着いた人の姿を見るのです。

ただ、「何教でないとだめだ」とか、「何教でないと救われない」というのではなく「何教でもいいから、私は」と言っていると、結局は何教にも入らないということになってしまふと思うのです。ここが重要なところではないでしょうか。

ですから、人は何かの文脈の中で、たとえば仏教の文脈、キリスト教の文脈、イスラム教の文脈の中で人生を送り、そこに帰属して自分自身を深め、人々と交わり、われひと共の幸せのために生きていくと思うのです。

それを、マザー・テレサは実践された。われひと共のというよりマザーや法然上人はわが身を投げ打って万民の幸せのために生き抜かれたと思います。そして、法然上人が今、生きておられたら、やっぱり、マザー・テレサと同じようなことをなさったのではないかと思うのです。

浄土宗という、南無阿弥陀仏の宗教を、ご自分の中に確立して、それをしっかりお持ちになりながらも、そこで普遍ということに至られていたと思うのです。

それは、法然上人自身もこうおっしゃっています。どなたかが、「浄土宗でないと救われないのでしょうか」という質問をしたことに対して、「自力でも救われる。ただ南無阿弥陀仏を称えれば、百人が百人とも極楽浄土に導いていただける。だけど自力の場合は、

千人のうちの一人か二人しか行けない」と。このみ教えはテレーズのことばでいえば、一歩一歩自力で難行苦行して天国に行くのではなくて、神の腕に抱かれて、つまりエレベーターに乗って神の国に直行する、ということではないでしょうか。

法然上人は、南無阿弥陀仏の教えを一生懸命説かれながらも、そこで「自力の人は、地獄に行く」とか、「付き合っではいけない」とか、そういうことはおっしゃっていないのです。自力の人も尊敬して、他の道を行く人として尊敬して、「怖がらないで」という言葉を、どこかのお手紙で使っておられるのですが、自力の人にも同じように、むしろ、「そんな困難な道を、よくまあ行きますね、ご苦労さま」というような気持ちを持ってもらったのです。

でも、「こつちには、優しい、ありがたい道があるんですよ」ということを教えながら、接しなさい」とおっしゃっています。

長谷川 相手を否定せず、さりとて迎合もしない。相手のことを真に尊重する接し方ですね。石丸 ですから、現代に生きておられたら、やはりマザー・テレサと同じことをなさると思うのです。

マザー・テレサは、カトリックのシスターですが、あらゆる人に、万人平等ということに対応されていた。そこに、現代における法然上人のお姿を見るのです。

テレーズも、マザー・テレサと同じだと思います。

こういうことを言っています。テレーズが亡くなる寸前ですが、周りにいた修道女が、「あなたは、天国に行つて、嬉しいでしょう。今は病気ですごく苦しんでいるけれども、天国に行ったら楽になりますよ」といって、慰めたのです。

すると、テレーズは、「私は天国に行つて、楽をしようとは思いません。天国に行つた

ら、ますます私は忙しくなるでしょう。助けを必要としているあらゆる人のところに駆けつけて、私は、世界中を巡りながら、手を差し延べながら、これから死後の世界を生きていきたい。今までよりもっと多くの人々の必要に応えられると思うと心が高鳴ります。神様もそれを許してくださいでしょう。もっと忙しくなり、私は天国でひと休みするようなつもりは全くありません」というように答えたのです。

長谷川 まさに、それも法然上人ですね。

石丸 ええ。法然上人も、式子内親王へのお手紙の中で、そのことを一言おっしゃっています。極楽に行ったあとは、化導といえます。ともども手を携えて、一刻も早くこの世に戻ってきて、助けを待っている人たちに手を差し延べましょう。あなたとは初めてお会いしたときから、そのことをお約束したことを思い出してください、こういうことをおっしゃっているんです。

ですから、法然上人は全く同じなんです。

時代的な制約があっても、法然上人はそこまで、普遍にまで至り着かれたということは、その後八百年たちまして、今日、ここにおられたら、法然上人はもともと現代に適應した生き方というか、ご自分をしっかり持ちながらも、浄土宗の僧侶として、万民救済のために尽くされて、マザー・テレサと同じように共生きに生き、活動され、当然ノーベル平和賞をおもらいになったと思うのです。

長谷川 ありがとうございました。最後にとてもうれしいお言葉を聞くことができました。でもそれは、今の私たちが法然上人の門下生として、法然上人が目指した生き方、なさろうとしたことを、してゆかなければならないということだと思えます。

(終わり)

講師

ひろさちや 「お浄土のはなし」



ひろさちや

1936年大阪生まれ。東京大学文学部哲学科卒業、同大学院博士課程終了。気象大学校教授を経て、大正大学客員教授。宗教思想家。仏教、インド思想の研究、執筆等に幅広く活躍。一般の人々に仏教を平易な言葉で身近なものとして伝えている。

主な著書に『仏教の歴史』全10巻『釈迦』『仏陀』『因果にこだわるな』（春秋社）『どの宗教が役に立つか』『仏教とキリスト教』『仏教と神道』『宗教練習問題』『お念仏とは何か』（新潮社）『わがふるさと浄土』（宝蔵館）『わたしの南無阿弥陀仏』（佼成出版社）など500冊を超える。

会場 東京芝大
大本山増上寺 慈雲閣1Fホール

□東京都港区芝公園4-7-35

□地下鉄都営三田線芝公園または御成門下車徒歩3分
地下鉄都営浅草線大門下車徒歩5分

JR浜松町下車徒歩10分

6月25日(火)

午後1:30開場 午後2:00開演(3:30終了予定)

会費 **1,000円**
(当会会員無料)

お問い合わせ先

— 法然上人鑽仰会 —

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階

電話 03-3578-6947 FAX 03-3578-7036

寺院紀行

東京・八王子

長圓寺

撮影／タカオ力邦彦

文／真山剛



長圓寺山門。立派な寺号塔が建っている。

「増上寺の御忌唱導師を勤めるのに、恥ずかしながら三度も涙をこぼしました。今振り返ればそれだけ自分の中から色々な想いや感情が溢れ出てきた、ということでしょうね」。平成二十五年四月六日、浄土宗大本山増上寺の御忌日中法要唱導師を勤められた東京・八王子の長圓寺第三十一世長谷川次應住職は、涙の話をしてくれた。

以前、80歳の方からこんな話を聞いた。「歳を取ると『三つのK』が出てくる。頑なになる、葉の世話になる、感動しなくなる」。なるほどと思ったが、二年後には77歳を迎えられる長谷川住職は感動、感謝の涙を三度もこぼされたというのだから素晴らしい。

最初の涙は打ち合わせで総代さんや寺族に励まされた時、二度目は唱導師役を支援してもらった、かつての同僚・学友から祝福された時、そして教書伝達式で最年長者として挨拶をした時だという。いったい長谷川住職の涙にはどんな想いが込められていたのだろうか。

その前に、御忌の説明をしよう。御忌とは、それまで天皇や貴人の年忌法要を意味する言葉だったが、大永四年（二五二四）、後柏原天皇が法然上人の忌日法要に使ってよいという「大永の御忌風詔」を発せられ、以来浄土宗で建暦二年（一一三三）一月二十五日に往生された法然上人の御徳を讃え、報恩感謝の気持ちを込める忌日法要として御忌と呼んできている。中でも大本山増上寺の御忌は桜咲く四月に移され、大門からの公道をお練り行列する特別なものである。



御忌後の祝宴でお祝いを述べられる大本山増上寺八木泰生台下と長谷川住職（右）。八木台下はかつて長圓寺の施願鬼会で大本山布教師として法話をされた思い出話をされた。

この御忌は増上寺で一番大きい法要で、主役となる唱導師を勤める寺院の檀信徒の皆さんの理解と応援、近隣寺院の支援、行列と法要に随喜する有縁寺院の協力、そして寺院の親戚である法類、寺族と呼ばれる家族が丸となり、さらに事前の習礼（練習）、増上寺法主から唱導師拜命の書面を直接戴く教書伝達式、そして当日、と一年近く唱導師を支える増上寺の役職者と僧侶が一体となって初めて御忌が厳修されることになる。そして、増上寺御忌唱導師の功績はその寺はもとより、本山の歴史にも刻まれる。

その大役を勤められた長谷川住職の寺は、照念山月崇院長圓寺。北条氏が築城した八王子城の城下町に関東を代表する檀林寺院、大善寺を開山した讃譽牛秀がその隠居寺として天正三年（一五七五）に開山した寺院だ。甲州街道の裏街道だった旧陣馬街道に面し、昨年切り倒した境内の大杉が目印だった寺で、近くの諏訪神社とともに地元の中核の寺院である。加えて明治時代には学校が、八王子の町が現在地に移った後は元八王子村役場が置かれた寺でもあった。

実はこの長圓寺に入る前、長谷川住職は増上寺に通っていた。法式を特別に練習する増上寺式師会、横笛や笙といった雅楽を習う増上寺雅楽会に籍を置いていたからだ。ともに普通の僧侶以上の特別な修練を積む会だった。今回の御忌では、当時の式師会の方も含めて増上寺の役職として唱導師を支えてくれた。



お稚児さんに灌頂する長谷川唱導師。
お孫さんにも灌頂された。

「回りはみんなかつての先輩、同僚、後輩ですから、とても緊張した」のも、その「仲間からの祝福に涙した」のも無理はない。

もちろん長谷川住職の涙の理由はこれだけではない。取材中に訪れたお檀家さんと優しい笑顔でお話しされていた穏やかな長谷川住職だが、その僧侶人生は穏やか、という訳ではない。

「昭和四十六年、三十一歳の時に大正大学に入学しました。その時は既に浄土宗の僧侶資格もあり、法式や雅楽も学んでいました」という大学の入学式当日が長谷川住職の結婚式の当日でもあったという。

昭和十四年、長谷川住職は高輪に在家の家の次男として生まれる。今もその面影が残っているが、長谷川少年は優しく可愛い顔の子供で、遊び場は家の向かいの浄土宗光臺院^{こうだいいん}。境内でボール遊びをしていると、光臺院の金子貫応住職からよく声をかけられた。「僕、かわいいね」「うん！ みんなそう言うよ」。少年の中にお坊さんになりたいという気持ちが芽生えはじめた。

長じて父の会社を手伝っていた長谷川青年にある日、光臺院住職から寺の運転手にならないかと声がかかる。一年前の昭和四十年、中古ながらビートルを買った青年に道が開ける。住職の一言で、父が創業し、兄が社長となっていた会社を辞め、住職付き運転手の仕事を選んだ。しかし、運転手という仕事は血気盛んな青年には物足りない。そんな様子を察したのか、運転以外のことも手伝うように



長谷川唱導師の脇では、法類を始めとする僧侶が見守っている。

なり、そして僧侶になるかと勧められたのである。

「今でもよく覚えていますが、僧侶になるかと言われた時、えっ、坊さんになれる、と内心大喜びでした」。幼い頃から僧侶と触れ合っていた長谷川住職、こうして僧侶の道を歩み出すこととなった。二年は我慢しろと言われ修行に入る。大学ではなく、僧侶養成の特別講座で、年に都合二か月ぐらい本山に入り、それを二年間、そして三年目におよそ一か月間籠り切りとなる最終修行で浄土宗僧侶となった。好きではない勉強、辛い修行を必死の思いでこなしての三十歳の新人僧侶の誕生だった。

さらに恵まれたことに、光臺院のある城南組寺院には、すでに遷化されたが法式の大家の津田徳翁上人がいて、長谷川青年の指導も兼ねて三田法式会が作られた。その津田上人を始め、多くのスペシヤリストがいるこの会で鍛えられたのである。加えて津田上人の引きで増上寺の式師会、そして雅楽会にも入れてもらえた。

こうした思いもよらない好環境に恵まれ、僧侶として一人前以上になった長谷川住職に養子縁組の話が持ち上がる。相手は八王子長圓寺長谷川圓明住職の一人娘定子さん、六歳年下のお譲さんだった。定子さんを気に入る、さっそく寺を見に行った。長圓寺は田畑と竹林に囲まれた茅葺きの寺で、かなりガタのきた寺だった。

「本堂にはつかえ棒がしてあるし、位牌壇にはなんと裏の孟宗竹

唱導師を勤めたことで増上寺の書宿^{きしやく}という肩書となる。



唱導師を勤めるにあたり増上寺から拝受する書面。



が忍び込んでいる。二年前に新築された庫裏も、普請が悪かったせいか隙間風と雨漏りがする。正直、どうしようかな。やっていけるかな……と悩みました」。そんな青年僧を師僧である光臺院住職が後押しする。「やりがいがあるではないか、新本堂を建てるのも君の仕事だ」という言葉に、長谷川住職は決心した。

こうして、三十一歳の四月十日に結婚式を挙げたのだが、義理の父となる先代から僧侶の資格があっても高校卒業では駄目だと、大正大学へ入学することになる。「大学の勉強は辛かった」と振り返る学生生活が始まった。今回の唱導師を支えた一回り以上歳下の同級生が振り返る。「最初の法式の授業で、長谷川さんが指名され、『願我身浄がんがしんじよ』とお経をあげ始めたら上手いのなのって！」。

先に述べたが、法式はすでにプロである。一般学生がまだ不慣れな実技や読経、立ち居振る舞いは既に身につけている。しかしそれ以外がいけない。楽しくない授業よりアルコール……と昼休みに近くで一杯も珍しくなかったという。とはいえ、住職になるまでは寺からの給料は少なく、有縁の寺の手伝いをした御礼と都立保育園の保母をしていた妻の給料で生活を賄っていたのだから、贅沢が出来る訳ではなかった。

しかし、ほとんどの学生が自分より一回り以上下の若者で、僧侶の資格を取りに来ている中、すでに資格を持ち法式のプロである長



祝宴で御礼の挨拶をされる長谷川唱導師。温和な顔が印象的だ。

谷川住職にとつての大学生活がどんなものだったかは想像に難くない。辛い毎日にさらに大きな出来事が起きる。

最初に授かった男の子が一歳三カ月の時に肺炎で亡くなつてしまつたのだ。風邪の熱という診たて違いが手当てを遅らせたらしい。他の病院の小児科医からなぜ少しでも早く……と言われたがすでに手遅れ、悔やんでも悔やみきれない息子の死だった。そして長谷川住職以上に先代住職がこれを残念がつた。一人娘にできた男の子、先代住職にしてみれば血の繋がつたこの初孫は大切な後継者だった。そして、第二子の女の子に継代という名を先代住職が付けた。今は隣の寺に嫁いで男の子を二人儲けている継代さんだが、あなたが寺を継ぐから継代なのよ、と育てられたという。

さて、気が強かつたという先代住職はもともと静岡の浄土宗寺院の次男で、そのお寺から同じ県内の寺、そして宮城県の寺へと移り、最後に当時は住職が居なかつた長圓寺に入る。檀家が二十数軒の寺で、東京都の公務員をしながら寺を維持していたものの、どこか他に寺は、と探していたという。先代住職はなかなか思い通りにならない夢を初孫に託そうとしていたのかもしれない。

話を戻そう。長男を失つた長谷川住職はその辛さで半年間学校を休み、退学を考えた。が、大学の先生の「あなただけが不幸な訳じゃない、私も空襲で家族を亡くしている。辛抱し、卒業したら」とい

昭和54年、解体される前の藁葺き屋根の長圓寺本堂。



う言葉で踏み留まり、六年間かかったものの無事卒業した。

しかし、先代とはなかなかそりが合わない。孟宗竹どころか天井からムカデまで落ちてくるようになった本堂再建を相談したが一喝される。しかし、他の寺の法務を手伝いながら再建を目指した。そして、昭和五十五年に新本堂の落慶を迎えることができた。平成七年には先代住職が遷化、そして続いて先代住職夫人が亡くなられたが、亡くなる直前の「何もしてあげられなくて悪かったわね」の一言が今も長谷川住職の心に残っている。その後、妻の定子さん、娘の継代さんと一緒に長圓寺の興隆に全力を注いだ。

「妻がいなかったら、また多くの方々の支えが無ければ今の私はありません。今回の御忌唱導師の話をいたくずっと以前の話ですが、増上寺で御忌の手伝いをしている頃に、『もしいつかあなたに唱導師の話がきたらお受けしてもいいのよ。一生懸命頑張っているのですから』と言ってくれてね……」。その奥様は四年前に突然他界され、残念ながら唱導師の晴れ舞台を見ることができなかった。

長谷川住職の一代記となったが、こうした僧侶人生で迎えた御忌唱導師。在家から寺に入り、苦勞を重ねてきただけに、三度の涙を流し、増上寺の法然上人に向かい「このような私でも宗祖を讃じ、念仏させていただける嬉しさに目頭が熱くなった」のは無理からぬことのようなのだ。

(ルポライター)



今の陣馬街道沿いに建つ長圓寺の案内石碑。

連載

会いたい人 関 容子



仲代達矢
さん
上

撮影／タカオカ邦彦

仲代達矢がイブセンの『幽霊』オスワル役で注目を集めたのは昭和三十年九月、弱冠二十一歳の新人だった。

すらりとした長身で、どこか虚無の匂いが漂い、暗く光る大きな眼が特に印象に残っている。しかし最も特徴的だったのは、ちよつと鼻にかかるような、乾いているのに甘さのあるその声だった。

私はそのころ女子大に入りたてだったが、中学生のころに兄と三越劇場で観た武者小路実篤の『その妹』の滝沢修を真似て「そんなことはあ、ありません」とやっては兄に褒められていたので、声色を使いたくなる役者は名優、という思いこみを持っていた。きつとこの新人は大物になる、とそのとき生意気にも思ったものだった。今考えると、仲代達矢の声は滝沢修に似ていないこともない。多分、私の好きな声なのだろう。

『幽霊』を是非観るように私にすすめたのは、通学の電車でよく逢うほかの学科の友人で、

「俳優座のナカシ、ロタツやって人がすぐく素敵よ」とのことだった。私は観てきてまた彼女に逢ったときに、その陰鬱な幕切れの台詞、「母さん、僕に太陽をください、太陽を、太陽を……」と、父親の悪い病気の遺伝で廃人同然になるオスワルの声色をやってみせたりした。

世田谷の岡本町にある無名塾に仲代さんを訪ねてこの話をする、と、大昔の『幽霊』から観ていることにまず驚いてくれて、「ナカシロ」の話になった。

「僕が俳優座養成所二年のころ、黒沢組でオーディションがあるから、（背の）大きいのだけ行け、つて言われて、同級の宇津井健とか先輩の安井昌二さんとか、二十人くらいで行きました。僕は黒沢明さんの映画は『姿三四郎』から見始めて『酔いどれ天使』『生きる』『白痴』とかまで全部観ていて、そのスケールの大きさに憧れていましたから、張り

昭和39年、俳優座設立二十周年記念公演「東海道四谷怪談」で伊右衛門を役じる仲代さん。



切りましたよ。東宝撮影所にそのとき初めて行って一列に並んでたら、黒沢さんが出てきて、ずいぶんでかい人だなと思って見てたら、僕のところへ来ました。名前を訊かれて、当時まだ本名で『仲代元久です』と答えたら、『え？ ナカダイ？ それ違うよ』って言うんです。何が違うのかと思ったら、『君、それじゃ重箱読みだよ、ナカだったらシロかヨだよ。ナカシロだろ？』って言うんですけど、でも先祖からこれなんですからね。でもそれで印象に残ったのか、七人くらい選ばれた中に入って、通行の浪人役ですが、野盗から村を守るために、食えない浪人者をお百姓たちが見つくるって、雇おうというわけですよ。そのとき監督から大変な目に遭わされた、という話はいつかテレビで仲代さんが語っていた。

「ええ、ちんまげ丁髷も刀差すのも初めてで、『歩け』って言われて歩いたら、『何だその歩き方は、重い刀差してちょこちょこ歩くな』って。今、

テレビの時代劇観てると、そういうのがいっぱいいますけどね。『俳優座じやいったい何教えてるんだ』とかさんさん満座の中で言われて。これが朝の九時開始。志村喬さんや三船敏郎さん、三百人くらいのエキストラを待たせて、まあいいか、となったのが午後の三時です。その間、こいつに飯食わせるな、って言われて助監督のチーフに裏の道に連れてかれてひたすら歩く稽古ですよ。今思えばそんな小さな役、誰かに替えればいいんですよ。それをしなかったのは、どこか見どころがあったのかもしれない。あとになれば有難いことだったけど、でもそのときはじつに屈辱的じゃないですか。よし、将来もし俺が偉くなっても、絶対に黒沢組には出るもんか、と心に誓ったですよ、馬鹿馬鹿しくもね」

のちに仲代さんは黒沢組の常連スターになるのだが、その話はまたあとで。

仲代さんの映画本格デビューは、意外に早い。当時日活の看板女優だった月丘夢路が

『幽霊』の舞台を観に来て、すっかり惚れこんでしまい、彼を自らの主演映画『火の鳥』の恋人役に、と望んだのだった。

「ある日、ラジオ局にまだ恋人だったころの女房（宮崎恭子）を迎えに行ってロビーにいたのを上から月丘さんが見たらしい。共演の金子信雄さんに『あの人、だあれ？』って訊いて、それですすめられて『幽霊』を観に来たんですね。『火の鳥』は伊藤整原作の文芸作品で、月丘さんが新劇女優で僕は相手役に選ばれる新人俳優、ちよつと突っ張ってる。海岸とかベッドとかでラブシーンがありま

したけど、もちろん僕は初めてで、緊張してコチコチになっていたら、『何やってんのよ』って、月丘さんにボンとお尻を叩かれました。

あのととき控え室で一緒だったのがまだ慶応の学生だった石原裕次郎さんで、お兄さんの『太陽の季節』にちよつとした役で出てるんで、別に役者になる気はない、と言ってまし

た。しかし、初対面でこの人は将来絶対スターになるだろう、と思いましたね。僕らのような養成所育ちは芝居が頭でつかちになるけど、こういう自分そのものを画面にぶつけられる若者のほうが人気スターになるだろうな、と感じて、その通りになりましたから」

その一方で、日本人離れした彫りの深い容貌と、知的で、屈折した鬚りのある、ちよつとアラン・ドロンの色気のある仲代さんは、どんな人気スターになっていた。

仲代達矢は昭和七年十二月十三日、東京、目黒に生まれた。

父親は茨城県の豪農の家に生まれたが、わけがあつて家を継がず、東京に出て車の運転手などさまざまな職に就いたが病弱だった。母親は五反田小町と呼ばれた薬局の看板娘。「父は家を飛び出して、車を一台買って運転手をしてましたが、結婚して娘が一人生まれ、たところその奥さんと死別するんです。

そのころ毎晩娘を連れてお風呂に通う姿にその五反田小町が惚れましてね。結婚して僕と弟と妹が生まれたところで、父が結核で亡くなるんですが、僕は七つ、まだ小学校二年のときです。そのころは千葉県の船橋にいて、父は京成電鉄に勤めていましたが、元気なときは僕を連れて旅廻りの歌舞伎とか、肩車してくれて映画館に行ったものでした。

いよいよ亡くなるというときに、僕と手をずつと握り合っていたんですが、つくづく僕を眺めて、『こいつは悪くなるから氣をつけろよ』ってお袋に言ったんです。子供ごろにこれはショックで、はつきりと覚えてますね。どうしてそんなことを言ったのか」

それは仲代さんが二枚目になる目鼻立ちだったの、将来女を泣かせるほうの「ワル」の意味と、そう言っておけば意地でも悪の道へは進むまい、という親ごころではないだろうか。

この話を伺いながら、私は昔（昭和四十七

年)の大河ドラマ『新平家物語』のワンシーンを思い出していた。十七代目勘三郎が演じる清盛の父宗盛が亡くなるときに、清盛役の仲代さんの顔をつくづく眺めて、「お前の目玉は大きいなあ……」と呟く。多分これは台本にはない先代勘三郎が感じたままのアドリブだったろう、と思われる。

「ああ、そういう場面、ありましたね。先代勘三郎さんはその前(昭和四十年)に映画の『四谷怪談』でも、僕の民谷伊右衛門と直助権兵衛で共演していただいてます。

しかし、そうなんです、たしかに親父は反面教師的な効果をねらってそんなことを言ったんでしょね。僕は悪くはならず、至極真面目で、ちよつとモヤァツとしてますから」

仲代さんの愛称「モヤ」の由来。

「うちの母親は江戸っ子でヒとシが言いくくって、僕の本名元久がモトシサになつてしまふので、坊やのやをつけて『もや』と僕を呼んでいた。それが普段はいつもぼんやりして

るみたいな僕に打つてつけの綽名だというんで、俳優座に入ってから、映画に出るようになってからもずっとそう呼び続けられています。

平(幹二郎)なんか一年後輩の五期のくせに、僕をそう呼んでましたから」

父親の死後、仲代家の生活は大変になった。いろんなアルバイトをしながら定時制高校に通うが、そういう毎日の中でも映画を観ることだけは欠かさなかった。

「三度の食事を一度にしても、年に三百本は観てましたね。三本立てを二回繰り返すとかして。で、金がなくてもプログラムは買うんです。それを見ると、外国の俳優は大抵大学の演劇科とか演劇学校に行つて勉強してる、ということがわかりました。

夜学では疲れて寝てばかりいたけど卒業させてくれて、でも学歴がないに等しいし、身体だけはいかからボクサーになろう、と思つて三か月くらいジムに通いました。しかし

殴られるのがいやでやめましてね。

そのころ大井競馬場で、鑑札なしの偽予想屋を取締まるアルバイト、というのをやってまして、その競馬場にいる年上の人が、お前、声がいいから歌手になったらどうだ、って言われてね。でも僕は非常に内気な性格で、学芸会にも出なかつたし、卒業写真でも一番後ろで顔は半分かくれてる、みたいな子供でしたから、紫のスーツにスパンコールなんか光らせる歌手はとっても無理、と思つてた。したら今度は、お前、顔がいいから役者はどうだ、って。それで考えて、役者の中でも一番地味なのは『新劇』つてものだ。そのためには俳優座の養成所へ入つてアカデミックな演技の勉強をしよう、と映画のプログラムで得た知識がここで役立つわけなんです」

養成所の試験に合格し、今度は夜のアルバイトに変つて、バーやキャバレーの給仕として働いたが、それでも月謝九百円がなかなか

払えず、滞納者のリストが六本木通りの一番目立つ俳優座の外壁に貼り出されたりした。「それどころか決まりかけた役をおろされたりもしましたよ。そのとき力になつてくれたのが僕の腹違いの姉です。そのころ姉は新橋で三木のり平さんのお母さんがやつた料理屋で仲居をしてました。九百円は私が出してあげる、と言われて、毎月もらいに行くんですが、弟さん見えたわよ、って呼ばれると姉が奥から出てきてこつそり金を手渡してくれる。まるで新派悲劇の世界ですよ」

三年間で卒業となり、仲代さんは選ばれて劇団員に残ることになった。このとき「達矢」の芸名を考えてくれたのがほかならぬこのお姉さん。

「姓名判断にも訊いたらいいけど、僕が射手座の生まれなので、的に達する矢のごとく、という意味もこめられていたらしいです」

そしてそのころ、仲代さんは生涯の伴侶となつた宮崎恭子さんと出会い、たちまちハ-

トにその愛の矢が達してしまう。

「彼女は二期生で、同期の小沢昭一さんとかと一緒に新しい劇団の『新人会』というのを作ったんですね。だげど養成所時代から『森は生きている』（マルシャーク）という芝居は彼女がわがままな女王様、主役ですよ。それで新人会にいてもこの芝居の俳優座公演のときは戻ってきて出演するんです。僕は警備隊の士官役で、並び大名みたいに後ろにいた。それで帰り道がどちらも京王線なので、何度か一緒になったんです。彼女は初台で、僕はその先の千歳烏山でした。それでまあ、恋仲になって、僕も初台で降りて、彼女の家で夕飯をご馳走になったりするわけです」

そのころのお二人のほほえましい情景を、ずっと前に岸田今日子さんから聞いたことがあった。

「大きなモヤの周りを小さな恭子さんが嬉しそうに見上げながら小鳥のように廻ってるの。可愛らしかったわよ」

『森は生きている』が昭和四十年五月、大抜擢の『幽霊』がその年の九月だった。

「毎晩のように彼女の家で夕飯を食べるようになって、彼女はそろそろ父親に申し込んでくれ、つて言うんだけど、そのお父さんて人は裁判官で厳格な人でしてね、食事をしててもほとんどしゃべらない。一週間くらい言い出せないで、ある晩やつと『実は……お嬢さんをいただきたいんですが』と言ったら、ブイツと二階へ上がった。あとで恭子さんに訊いたら『娘を別にやるわけじゃない』つて言ってたそうで、今度は『どうか結婚させてください』つて言ったら、またブイツと二階へ行っちゃつて。でも結局無言のうちに許してくれました。あとで聞いた話だと、『あいつは余計なこと言わないのがいい』つて」

二人は知り合ってから二年後に結婚する。式と披露宴は東京、半蔵門の東條会館。結婚を機に恭子さんは思い切りよく女優をやめてしまう。

昭和33年、「人間の條件」ロケ中の仲代さん、隣は奥さまの宮崎燕子さん。



「男に惚れるようじゃほんとの女優とは言えない、なんて言っていました。その後、演出をやったり脚本書いたりしてましたけどね。」

それにしても、神様というのは公平だなあと思いますね。二十歳ごろまではどん底の苦勞続きで、その後は作品にも演出家にも監督にも女房にも、いい巡り合いがあつて、今も現役でいられるのは、神様がいい配分をしてくれたんだなあ、とつくづく思いますね」

私は仲代さんの舞台は『幽霊』に続いて、『タルチュフ』『令嬢ジュリー』『愛と死との戯れ』『ハムレット』などの翻訳劇を観て、そういうジャンルの舞台俳優、と思っていた。

しかし昭和三十九年十一月、都市センターホールで南北の『東海道四谷怪談』の伊右衛門を観たときは衝撃が走った。歌舞伎役者（当時は海老さき時代の十一代目團十郎）以外に、こんなゾクゾクさせる色悪（いろあく）を演じられる俳優が新劇にいたなんて……。

「演出の小沢栄太郎先生が、歌舞伎の台本通り、いじらずに舞台にかけたんです。僕はそれまでバタくさい芝居が多かったので、改めて日本語の台詞の美しさに感動したものでした。」

文学座の杉村春子先生が観にいらしてて、僕は初めて脚に白粉塗って出たわけですが、あとになって『あなたの伊右衛門はすごかった。うまい、とは言わないけど、脚がきれいだったわよ』って」

でも、どうして普通の家庭で育って、突然変異のようにこういう役者が出てきたのだろう……。でも、どうして？

すると、意を決したように仲代さんが言う。「これね、八十一年間黙ってたことなんだけど、関さんに思い切って言っちゃいましょう。僕の親父は背も高くていい男で、團十郎顔してるんです。いわゆる役者顔。僕のお袋が八十八歳で亡くなる時に言ったんですが、お前のお父さんは役者の子なんだよ、って。つ

まり、親父の実家は茨城の豪農で、旅廻りの一座を泊めたりするんですね。そこで僕の祖母に当る人という男の座頭とが不倫の恋に落ちて一時駆け落ちをする。それで生まれたのが父というわけですが、しかし体面を重んじて秘密裡に事をすませて、祖母はまた元の鞘に納まるんです。それからまた弟や妹を生むんですが、それが少しも父には似ていない。僕の芝居を父の親戚が観に来て楽屋へ来てくれたりしても、誰も父に似てないんで、ヘンだなあ、と思ってました。

だから僕は俳優には向いてないと長年思ってたけど、実は血が、DNAがあつたんだ、と納得しました。弟（圭吾）もシャンソン歌手ですから、やつぱり血なんでしょうね。これ、僕と、亡くなるちよつと前の女房と、弟と妹しか知らない話です」（つづく）

阿弥陀ほとけは大慈大悲の誓願を起こしたまい、生死の大海に弘誓の船を浮かべ、罪深き極重の悪人をかの岸へやすやすと渡し給うなり。すなわちこれを他力と申すなり。そのこころを善光寺の御歌にいわく。

急げ人 御法の舟の 出でぬ間に 乗り遅れなば 誰か渡さん、と。
この世は老少不定と云いながら、もし我れより先に成仏しまさば、金の蓮台を半座あけて待ち給え。又我れ先立つ者ならば、御臨終の砌には、紫雲に乗じて御迎えに参るべし。

(法然上人「御母子往復消息」)

阿弥陀さまは大いなる慈悲の誓願を発して、迷いの世界に念仏往生願という大船を浮かべ、罪深きすべての人々を極楽浄土へと容易くお渡し下さいます。この働きを他力と申します。その心を善光寺の御歌には「念仏往生願という救いの大船に間に合うように励みなさい。その大願の船に乗り遅れてしまったならば 誰がお救い下さるものでしょうか」と詠まれています。この世は老少不定、もし私より先に母君が浄土往生を遂げられたならば、お浄土の金の蓮台を半座あけてお待ち下さい。又もし私が先立つことになったならば、母君が御臨終の砌には、阿弥陀さまと共に私も紫雲に乗ってお迎えに参りましょう。

時空を超えて——無量寿・無量光の救い——

去る四月二十七、二十八の両日、東京両国にある回向院で法話の席を勤めて参りました。毎年お招きいただいている「両国にぎわい祭り 回向院会場」での法話ですが、十一回目を迎える今年は、例年にまして大賑わいでした。というのも、今年は、戦後初となる、信州善光寺・一光三尊阿弥陀如来像の出開帳が回向院で行われたからです。今回の出開帳は、そのテーマを「東日本大震災復「幸」支「縁」と掲げ、東日本大震災で亡くなられた多くの方々のご供養と被災地の復興を目的とし、その収益は被災地支援に充てられました。そうしたことから、善光寺御本尊のご分身である出開帳でかいちよう仏や善光寺所蔵の多くの文化財はもちろん、大震災の被災寺院からも貴重な仏像が出品されていました。

『善光寺縁起』によれば、善光寺の一光三尊の阿弥陀さまは、インド・中国を経て、朝鮮百済くだらの聖明王せいめいおうから、欽明天皇十三年（五五二年）、わが国に仏教が伝来した際にもたらされた、日本最古の仏像です。

仏教の受容を巡り、崇仏派の蘇我馬子そがのうまこと廃仏派の物部守屋もののべのもりやとの間で争いが起こりました。蘇我氏と縁の深い聖徳太子は、形勢の不利を打開するため、自ら彫った四天王像に勝利を祈願されました。蘇我氏勝利の後、太子が建立された寺院が、わが国初の官寺である四天王寺です。その四天王寺の西門は日本三鳥

居にも数えられる「極楽門」です。鳥居中央の扁額には「釈迦如来 転法輪処 当極楽土 東門中心（ここは、お釈迦さまがお出ましになり、仏法、とりわけ、出世の本懐であるお念仏の教えを説き広められた地であって、阿弥陀さまの極楽浄土の東の門に当たっている）」と記されており、その扁額もすべての人々の浄土往生の願いを救い摂るという思いを込めて「箕」の形をしています。

蘇我氏と物部氏の争いの際、廃仏派の物部氏によって四天王寺の西に広がる難波の堀江に一光三尊の阿弥陀仏像は打ち捨てられてしまいました。しかし、その後、信濃国司の従者であった本田善光公は、目の前に現れたこの阿弥陀仏像をお連れし、長野県飯田市を経て、皇極天皇元年（六四二年）、現在の地に至り、善光公の名を取って「善光寺」と名付けられました。以来、宗派を問わず、浄土往生を願う数え切れない人々の信仰によって、善光寺は護持され続けたのです。このように善光寺とその一光三尊阿弥陀仏像は、わが国への仏教伝来当初から今に至るまで連綿と続く阿弥陀仏信仰の源流とも言えるのです。

善光寺が開創されてから、およそ千年後の明暦三年（一六五七年）に開創されたのが諸宗山回向院です。この年、江戸には「振袖火事」の名で知られる明暦の大火が発生し、一〇万人以上もの方々が亡くなりました。当時の将軍・

四代家綱公は、亡くなられた多くの方々を手厚く葬るようにと隅田川の東岸に万人塚を設け、念仏堂を建立し、宗派を問わず、亡くなられた方々の浄土往生を願ひ念仏回向を修めさせたのです。以来、回向院は、有縁・無縁に関わらず、人や動物に関わらず、命あるすべてのものの浄土往生を願う方々によって護持され続けました。そうした回向院ですから、江戸中期以降、全国の有名寺社の秘仏・秘像の御開帳が数多く催され、その境内は参詣する人々で大いに賑わいました。特に安永七年（一七七八年）の善光寺阿弥陀如来像の御開帳には、六〇日で一六〇三万人もの人々が参詣されたということです。

このように、インド・中国・朝鮮・日本と各国を伝来し、仏教の開祖・釈尊から日本仏教の祖・聖徳太子を経て、数え切れない方々による願往生の篤い信仰を集め続けてきた善光寺の阿弥陀さまの来歴を繙ひもときつつ、この度巡り合えた回向院出開帳での尊き仏縁を省みると、阿弥陀さまの時空を超えて広がる無量寿・無量光の救いの働きに思いを馳せずにはいられません。そして、冒頭の消息の中で、阿弥陀さまの救いの働きの広大さと善光寺信仰の道歌を紹介しつつ、母君に向けて俱会一処の喜びを懇切に語られている法然上人の優しさに、改めて親しみを感じると共に、尊崇の念を深くさせられるのです。

合掌（林田康順）

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第四十二回

第二部

来江の古城遥かなり

碧眼の比丘、ニヤーナティロカ その1



★前号までのあらすじ

時は明治の中葉。家業が傾き寺に出された渡辺芳蔵は十五歳で得度し海旭を名乗る。才気煥発ゆえ将来の宗門幹部として浄土宗学東京支校、同本校へ進学を許され、さらに明治三十年（一九〇〇）、廃仏毀釈で打撃を蒙った仏教再生の輿望を担って当時印度学の拠点であったドイツはストラスブルク大学へ留学。碩学ロイマン教授の薫陶を受ける傍ら、キリスト教改革派、社会主義者らと交わり仏教以外の知見も広める。留学四年目、スイスはバーゼルの万国宗教歴史学会で研究発表、そこで仏教に造詣が深いオーストリア・ハンガリー帝国元駐日代理公使ハインリッヒ・クーデンホーフ・カレルギー伯爵と出会い大いに刺激を受ける。

列強の仏教研究は 東方経営のため

ドイツへ留学して四年、渡辺海旭は、スイスはバーゼルの万国宗教歴史学会で研究発表する大役を与えられ、その懇親会でハインリッヒ・クーデンホーフ・カレルギー伯爵と出会う。大いに啓発をうけた。ストラスブルクに戻ると、寄宿の部屋を同じくする萩原雲来に感想をきかれて、久方ぶりの日本語ゆえか生来の吃音をいっそう募らせて答えた。

「て、哲人伯爵の仏教への造詣の深さには、お、おそれいった」

海旭は早くも半分ほど飲み干したビールのジョッキを口へ運ぶと、深くため息をついて、哲人伯爵が準備中の著作のこと、そのために多くの僧侶が伯のボヘミアの居城に出入りしていることなどをつおいつ物語った。

雲来は興味つきの海旭の土産話を聞き終え、と言った。「渡辺、いつもにまして吃音

がひどいぞ。こういうときのみみは何かいいたいことが山ほどある証拠だ。どうだ、図星だろう。さて、それはなんだ。言ってみろ」

海旭は深くうなずくと、「お、おぬしも、は、僕も、ロイマン教授の薫陶のもと原典に取り組んで四年になるが、ま、まだまだだ。こ、これではわが日本が遅れると心配でならんのだ」

雲来はいつものながら海旭の論理の飛躍についていけずに質した。

「日本がだめになるとは、またなんとも大きくでたものだ。しかし、われらが仏教研究がなぜ日本の命運と関係があるのだ」

逆に海旭は問い返した。「な、なんで西欧列強では仏教研究がかくも盛んなのか、わ、わかるか」

雲来は一瞬眉根を寄せて考えてから返した。「この間、西欧の探検隊によって西域で貴重な仏教経典が陸統と発掘されている。それが英国はケンブリッジ、わがドイツはストラス

ブルク大学にもたらされたことが機縁だ」

「そ、それは半分の正解にすぎない」

雲来は少々不満げな表情をみせた。「ほかにどんな理由と目的があるというのか」

「そ、その裏には欧米列強の東方経営に対する強い国家意志がある」

学問一徹の雲来は目をしばたかせた。「東方経営？ 国家意志？ つまり植民地進出と

いうことか。ほう、貴兄のとても僧侶とは思えぬ発想には、いつもながら驚かされる」

「な、なんの、なんの、そ、そもそも僧侶は寺門に閉じこもっておってはだめだ。徳川の御世の天海僧正をみよう」海旭は帰国後の活動を予感させる言い振りでつづけた。「こ、故人は臥榻の下、他人の鼾睡を容れずといったが、今日のわが日本国は自らの仏教研究の臥床をすべて欧米人に明け渡して、雷のごとき鼾をごうごうとかき、薄ら寒い陋屋の片隅でおそるおそる指示が下るのを待っているといふ、な、なんとも情けないありませんだ」

「きみはあいかわず口が悪い。ちといいすぎではないか」

「わ、わが故国は今ロシアと干戈^{かんか}をまじえんとする状況にあるが、彼ら露人の仏教研究からすると容易ならざることになる」

雲来はまたしても海旭の飛躍についていけず、眉間にしわを寄せた。

海旭はかまわず独演をつづけた。「ろ、露人の蒙古経営は目覚しいものがあるが、こ、これは一朝一夕のことではない」と言っ、とつとつと説明をはじめた。

すなわち、宗教言語風俗に関して彼らの根本研究は、実に時間をかけ本腰を入れて取り組まれてきた。たとえば海旭と雲来が生まれるはるか前に蒙露字典や蒙露文法が編まれ、多くの蒙古仏教聖典がカザン大学図書館に収蔵されている。さらには仏教因果譚である賽蔵西蔵訳の賢愚経には独語訳があつてわれらも重宝しているが、その翻訳は独逸人ではなく露国人によるものだ。しかもそれができた

のは、なんと弘化二年というから七昔前。露人はこのように大昔から彼の地のラマ僧を懐柔撫循^{じゅうぶじん}につとめ、漸次彼らを自家薬籠^{かご}のもととし、ついに蒙古を今日の状態に化ししておせた。わが日本では某公爵が新政党をつくるらしいが、長らく蒙古に遊んで仏教研究に同情をもつて重要な仏像仏画の蒐集^{しゅうしゅう}にこれつとめた露国某公爵のごとき遠大な眼識のある大宦人^{だいかん}をせめて一人か二人はほしいものだ云々。

海旭の長広舌^{ちやうこうぜつ}を聞き終えて雲来は大きくうなずいて応じた。「こ高説おそれいった。なるほど蒙古に進出するには、武力の前に彼の地の風土風俗の研究が必須である、それにはその大元となる宗教研究は欠かせないと」と言っ、ついで最後にちよつびり皮肉をつけくわえた。「われら僧侶も学問のための学問に淫してはならぬことはわかったが、ロイマン先生はなんといわれるか」

海旭は雲来の皮肉など意に介さず先を急い

だ。「ロ、ロイマン先生のもとで研鑽を積んでいながら、こ、これでいいのだろうかと思うことしばしばだ」雲来が怪訝な表情をみせるのを認めて海旭は説明をくわえた。「に、日本も東方経営に乗り遅れてはならない。そのためには彼らの優れた仏教研究から学ばなければならぬ。し、しかし、このまま彼らから学ぶ一方ではいいのだろうか。われらから彼らに鞭撻を与えるようにならないと、わが東方経営も相変わらず後塵を拝するだけだ」「しかし、われらだけで悩んでどうなるものでもあるまい」と雲来は返した。「まず宗門にも理解を深めてもらわねば」

「い、いや宗門だけではだめだ。ぶ、仏教界だけでもだめだ。が、学会だけでもだめだ」

という海旭はまたまた長広舌をふるった。

いわく、政治家、実業家、経世家などの実世界の人々が仏教研究の必要性和喫緊性を理解して大いなる支援をしてもらわねばならぬ。

碩学マックス・ミュラーの著書『印度は

何を我らに教えるか』に触発されて、英国上流階級の知識層が仏教經典蒐集の必要性に目覚めたように。またセシル・ベンドールがケンブリッジの教授となって獅子吼したため国を上げて印度研究が取り組まれることになったように。いまやわが国も識者、財産家、あるいは知識層に向かって欧米に学べと啓発を行うべきではないか。

「学僧」ではなく
優れた「僧侶」であれ

雲来はこほんとわざと大きな咳をたて海旭の話をさえぎった。「きみの高説はわかったが、ではわれらはミュラーやベンドールをめざすべきなのか。そのために宗門から異教の遠国へ送られたのか」

とたんに海旭は虚をつかれたように弁舌を中途で折るとしばし沈思した。と、両手をついて雲来に頭をさげた。「す、すまん。浅慮を恥じるばかりだ」

酔いのせいではない。海旭の豹変に雲来は驚いた。「いつものことだが、君の率直さには……」と言って言葉を飲み込んだ。

「ま、まことに痛いところをつかれた」海旭は口元をひきしめた。「自分で口舌をふるいながら、ど、どこかで何かが違うと感じていたが、冷静なるおぬしの直言で目がさめた。そ、そうなのだ、われらが目指すのは仏教研究の泰斗になることではない、今を生きている人々に仏教を生かすことなのだ」

「国の経綸けいりんに仏教研究を生かすことは確かに重要だが」と雲来は言った。「それは学者の道。われらは学僧ではない、あくまでも僧侶であらねばならぬ」

海旭は雲来の肩をたたくと、「そ、そのとおり。あ、ありがとう。わが雲来よ、きみがわが生涯の友だ」

ここで攻守とくを変え、今度は雲来が長広舌をふるう番だった。

「仏教研究では欧米に大いに先んじられてい

るが、教義の実践ではわれらには千四百年の長がある」と切り出すとつづけた。

いわく、ここ欧州の仏教は大学教室の仏教だ、専門家や研究家の書斎仏教だ。いささかくだけたところで、せいぜいがインテリたちが集う社交家や芸術家らのサロン仏教だ。とりわけここドイツにおいてはそうだ。それは、アジアの仏教界の僧侶たちが布教にやっつけて広まったのではなく、仏教を紹介する書物によって、つまり書斎から広まったという歴史的特殊性によっている。とりわけゲーテやワグナーなど文学や音楽が国民に仏教への関心を高めるのに大いに貢献した。さらにシヨールペンハウエルの哲学。これはさきほどの哲人伯爵との出会いで貴兄が体験したとおりだ……。

ここで雲来は話を終えようと思い海旭を見ると、口を開く気配がないのでつづけた。

「しかし、ヨーロッパでも仏教を学問・研究するだけではあきたらず、実践してみようと

いう動きがようよう出始めている。たとえばわがドイツでも……」

と、聞き役にまわっていた海旭が目を輝かせて話の先をうながした。

欧州初の比丘、 ニヤーナティロカ

「ついに出たらしい」と雲来は言っで一息いれた。「ヨーロッパ初の比丘だ、法名をもっていて、たしかニヤーナティロカという」

比丘とは出家してしかるべき戒をうけた僧のことである。

海旭は「ニヤーナティロカ」という言葉を反芻すると言った。「バ、バリー語で、ニヤーナは『知る人』、ティは『三』、ロカは『世界』。つ、つまり、三界（欲界、色界、無色界）を知る者か」そこで海旭はしばし瞑目するとおもむろに口を開いた。「か、漢名を思いついたぞ。『智燈』はどうだ」

雲来は呆れ顔で応じた。「まだ見ぬのに、

まるでわれらが友扱いだ。まったく君ときたら気が早いというか……。なんでも、われわれより五か六年下で、バイオリンも弾き作曲もする将来を嘱望された音楽家だったようだが、仏教に憧れ、一念發起してセイロンへ行き、修行の末にいに比丘になったらしい」

「お、音楽家か」海旭は関心をつのらせ目を輝かせた。「い、いったいおぬしは、その情報をどこから仕入れたのだ」

「実はロイマン先生のもとを尋ねてきた男がいて」と雲来は答えた。「なんでも菜食主義の料理人で文献を求めているとか。そのとき、ロイマン先生の指示で応対をまかされたのだ、ニヤーナティロカの弟子でたしかワッポーとか名乗った」

海旭は身を乗り出した。「そ、そのニヤーナティロカすなわち智燈に会ってみたいものだ。そして弟子のワッポーとやらにも」

「ニヤーナティロカこと智燈か」と今一度つぶやいた海旭の心中になにやら予感が奔っ

た。

ひよっとするまだあい見ぬ碧眼の比丘とは深い縁で結ばれているのではないか、と。実は予感的中する。それから三十年後、碧眼の比丘はワッポーをともなつて来日、帰国した海旭が住職をつとめる深川西光寺に寄宿、八年にわたつて宗教大学などで教鞭をとり『南方仏教の根本主義』を出版することになるのだが、もちろんこのとき海旭は知る由

もなかった。

また、ドイツに最初の「仏教伝道会」ができるのは二年後の一九〇六年。さらにニヤーナティロカを名誉会長に載いて「ドイツパーリ協会」が創設されるのはそれからさらに二年後の一九〇八年。このとき海旭がニヤーナティロカが存在を知らなくて当然であった。

(この項つづく)

古き伝統技 三代にわたる信頼

有限
会社

浄土宗法衣専門 古島法衣店

〒111 東京都台東区元浅草4の2の1
電話(03)384211289
振替0018002145231

第五十二回

御成道から
中山道

江戸を歩く

大江戸ウォーカ―
森 清鑑



◆散歩図

洪沢栄一

王子遊山の旅を終え、御成道を駒込に戻ろう。飛鳥山が途切れると、六石坂。なだらかな坂を下ると左右に一里塚が立っている。道の左右は西ヶ原村の畑が広がっている。明治になって飛鳥山に面する南一帯の畑が洪沢邸となった。洪沢栄一は偉大な実業人である。天保十一年（一八四〇）、今の埼玉県深谷市の豪農の家に生まれ、幼くして信州、上州まで藍あいを売り歩く。算盤を肌身離さず、七歳にして四書五経や日本外史を学び、一方で剣術は神道無念流からお玉が池の千葉道場で北辰一刀流を千葉栄次郎から学ぶ。この人こそ千葉の小天狗と呼ばれた千葉周作の次男にして玄武館の後継者。当代の名人、達人とされる剣豪を相手に九割もの勝率を誇った希代の名剣士で玄武館の鬼鉄こと、山岡鉄舟が柄の折れた竹刀であしらわれたといわれる。ところが文久二年（一八六二）三十歳の若さで没し

てしまった。しかし、洪沢はここで勤王の志士達と出会い、おおいに啓発され、尊皇攘夷の行動を起こす。あわやというとき、ふとしたことから徳川慶喜の家臣、平岡円四郎に出会う。そして彼の推挙により慶喜に仕えることになる。これが運命の分かれ目で慶喜が將軍になると幕臣となり、慶喜の弟、徳川昭武の随員としてパリ万博に行くことになる。欧州各国を歴訪し、産業、軍備を見、シーボルトの長男から語学を学び、商人の地位を目の当たりにする。日本では大政奉還があり、慶応四年、すなわち明治元年、新政府から帰国命令。帰るとすぐ静岡に謹慎中の慶喜に面会。これからは自分の道を行けと諭される。そこで洪沢は真の実業人として歩むことも国のためになると決意を固め、日本初の株式会社実現に乗り出す。しかし、大隈重信に説得され、大蔵省入り。明治六年、退官すると次々と新しい事業を興す。まず手始めが日本最初の第一国立銀行を軌道に乗せることである。これ

は官僚時代にその設立を指導してきたこともあり、頭取となる。これが第一銀行、第一勧業銀行となり、現在はずば銀行の前身である。渋沢はこのほかに数々の地方銀行設立を指導する。そしてここからが凄い。東京瓦斯、東京海上火災保険、王子製紙、田園都市株式会社（現東急電鉄・旧目蒲線）、秩父セメント、帝国ホテル、秩父鉄道、京阪電気鉄道、東京証券取引所、麒麟ビール、サッポロビール、東洋紡績といった新しい産業の旗手企業を設立する。その数五百有余に及ぶ。渋沢の偉いところは「私利を追わず、公益を図る」に徹した人生にある。幼きとき、論語より学んだ、「道徳なくして真の実業なし」を徹頭徹尾実践したところにある。だから、渋沢財団を創らなかつた。このような人だから、教育に熱意を注いでいる。一橋大学、二松学舎、同志社大学、日本女子大学、東京女学館といった各校の設立や振興に携わっている。勝海舟らと女子教育奨励会を設立したのも彼であ

る。失敗にこそ終わったが、日本のことを米国の通信機関に伝える通信社を企画したのも彼である。彼の面目躍如たるところである。これが時事通信社や共同通信社の元となった。現在の渋沢記念館を訪問するとその考え方や生き様の息吹を感じることが出来る。邸宅に隣接する、江戸時代からの貴重な一里塚の存続運動を起こしたのも彼である。そのおかげで御成道（本郷通り）の左右に江戸期そのままの一里塚が現存している。これは希有な例である。

染井の植木屋

左に御殿山の森、右に無量寺を見て、さらに南下すると谷戸川にかかる立会橋。渡ると駒込村の田畑が広がる。妙義坂を下ると、まもなく前方に柳沢の下屋敷、六義園の北角が見えてくる。この角を折り返すように西に転じると（染井通り）、左一帯は柳沢邸に続いて藤堂和泉守の下屋敷。この屋敷は三万坪以

上あり、さらに四万坪の抱え屋敷が取り巻いている。塀沿いに歩くと染井。右側一列に植木屋が並んでいる。ここが名木「そめいよしの」を生み出した江戸有数の植木屋園芸地帯である。植木屋一軒一軒がまるで植物庭園の態で庭木、盆栽、苗木、種苗のオンパレード。所々に自然の庭石、灯籠を配置。道沿いに生け垣。入りやすい木柵の門。武士も町民もこぞって庭内を遊覧。家来を連れた二人の武士が苗木を選んでいる姿もある。江戸時代このように園芸村が発展した理由は大名が拝領屋敷内にこぞって庭園を造営したために、植木や手入れの需要が増えたためでもある。加えて盆栽のブーム。真向かいの藤堂家下屋敷、拝領屋敷を始め、当然柳沢家下屋敷（六義園）の庭園造りの需要があった。ここの植木屋は単に植木を売るだけでなく、園芸の技術者、研究家であり、種苗の開発にも従事している。今日我々が桜を楽しむといえれば代表的なのがソメイヨシノ。これもここで開発され、江戸

中に広まっていた。ツツジ、菊、朝顔もその例である。全国から品種を寄せ集め、交配して数百に及ぶ花を生み出し、しかもその種苗を売る。ここで開発された品種が江戸中の大名は及ばず民家の庭に波及していったのである。吉宗を始め、歴代の將軍が幾度となく遊覧。プロモーションも見事で、江戸の人々は遊覧がてらこぞって遊びに来るようにした。たとえばツツジや菊の季節ならここで目の保養をした方が早いというわけで大勢の人々の遊覧場所として提供したのである。染井の植木屋の中でも江戸一番の植木屋として名が轟いていたのが伊藤伊兵衛。この人は日本で最初の園芸植物図鑑を作った人として名高い。染井の園芸地帯を造り上げたのも代々の伊藤伊兵衛が中心となっている。一族の墓は植木屋群の背後にある染井稲荷、西福寺にある。

巣鴨

御成道を白山の五叉路に戻って今度は中山

道を北に歩こう。白山札の辻の高札（幕府のお触れを江戸庶民に伝える）を読んで、大名の中屋敷を抜けると中山道の右側一帯に訓練場が広がる。左側は姫路藩、酒井雅楽頭の広大な中屋敷（二万一千坪）。これを過ぎると旗本、御家人の自宅が密集している。中山道は北の幹線道路。家康は江戸を守る防衛対策として武家屋敷で固めたわけである。

そして巣鴨御駕籠町。將軍の籠を担ぐ人々の住まいが集まっている。江戸ができる前の大昔、この辺り一帯は石神井川や谷端川（神田川に注ぐ）などの河川が織りなす、芦が茂る州や沼地、大池があり鴨が飛来し、巢を作っていた。これが地名、「巣鴨」の由来。嘗ては現在の池袋までの広い地域を指していた。中山道を板橋の宿場へ行く休憩場所として栄える。右手、前田加賀守の抱え屋敷が終わると、左手細長く伝通院領、子育て稲荷。ここに幕府の時を告げる「時の鐘」があった。巣鴨町の入り口である。さてここからは中山

道沿いに増上寺領が北に連綿として続いている。巣鴨町下組、中組、上組の増上寺領である。

巣鴨増上寺領

家康は芝増上寺を菩提寺とすると一六一〇年増上寺に一千石を授与。この時の寺領は都筑区の池辺村、橋樹郡の師岡村、荏原郡中里村そしてここ豊島郡巣鴨村であった。当時の経営資源は石高表記。増上寺領に隣接する西側一帯は巣鴨村の畑が池袋、雑司ヶ谷村まで広がっている。右側は武家屋敷が連綿と続く。再び中組増上寺領に高札が立っている。そしてその右側には、二千四百坪の一橋慶喜の拝領屋敷がある。明治になって数年間、慶喜はここに住まいした。すると左側、中組増上寺領を割る形で真性寺。街道に面して江戸六地藏三番の大きな地藏が門前に鎮座している。高さ二・七〇m、蓮花台を含めると三・四五m。深川の地藏坊正元の作。旅人はここで旅の安全を祈願し、往くのである。正直なもの



◆江戸名所図会 巣鴨真性寺 絵の下
に中山道 長門を入ると左に六地藏

で現代もここから地藏通り商店街が発展している。これは六地藏一番がある東海道品川寺周辺の商店街と全く同じである。

真性寺は真言宗で奈良長谷寺の末寺。細長い寺域だが現在よりもずっと広い。中山道に面した長門を潜ると左手に六地藏。まっすぐ進むと本堂。その後方に裏門がある。裏門を出ると果鴨村の畑が広がっている。

真性寺参詣の後、街道に出ると左は果鴨中組増上寺領が続く。右は御家人の家宅が密集している。ここに明治になって高岩寺（とげ抜き地藏）が移転。ここからは街道の両側が上組増上寺領である。右、御家人屋敷に隣接して幕府奥医師並、渋江長伯が経営する一万三千坪の御薬園がある（中央卸売豊島市場）。渋江は著名な本草学者（植物学者）であり、薬草栽培に業績を挙げた。

ここから中山道の両側が増上寺領になる。果鴨は菊の栽培で有名であった。これは近くの藤堂下屋敷北側に密集している植木屋群か

らもたらされたものであり、果鴨は「園芸の里」として江戸市民に愛された。そしてここから「菊祭り」が生まれる（現在も「すがも中山道菊まつり」が行われている）。果鴨の中でも特に菊の展示や販売が盛んであったのが、この上組増上寺領である。

その時には瓦版や浮世絵でも宣伝され、江戸っ子で大賑わい。上組増上寺領が終わると王子道と交差する右側に庚申塚（猿田彦大神）がある。江戸市民にはお馴染みの「果鴨の庚申塚」である。雪旦はこの賑わいぶりを克明に描いている。街道際の大木に葦簀張りの屋根をくくりつけ、下の茶店で休憩する人々。籠や馬に乗る人、荒ぶる力持ちをなだめている風の人たち。虫取りに行く子供達。旅人の姿。荷を運ぶ人。客を待つ馬子達。絵の右端に庚申塚があり、その脇の王子道を行く人たち。ここで飲み食い一休みして中山道を板橋に向かう大勢の人達の姿。周囲は全て果鴨村の畑である。



◆江戸名所図会 果鴨庚申塚の賑わい。左上、中山道を板橋へ。右端中央庚申塚。その側馬子がいるところから入る道が王子道。道標がある。

浄土誌上句会

●三

〔特選〕冬ニ日月女が葱を提げて行く

山口 信子

「冬ニ日月」というから、勤めの帰りだろう
か。帰って夕食となると、あとはもう寝るば
かりだろう。家で待つ者もいるのだろうか。
「葱」は冬の季語だから季重なりになるのだ
が、あまり気にならないようである。

〔佳作〕花びらを三三払いて家に入る

山内 桃児

居酒屋の三軒並び日永し

小林 苑を

三弦に三代かけし津軽の春

石原 新

●縁

〔特選〕崖の上縁切り寺のきぶし揺れ

當間あさ子

駆け込んで三年ばかりも居れば、夫との縁
が切れたという、女性にとつては有りがたい
寺である。寺の裏山にある崖は、駆け込んだ

女性を守っているように思われる。きぶしの
花がかんざしのように揺れている。

〈佳作〉

四月馬鹿茶碗の縁の御飯粒

斉田 仁

野良猫の居場所や縁の春日ざし

増田 能子

田の縁を塗り放水の音立てぬ

井村 善也

●自由題

〈特選〉

伊賀甲賀競いて桜咲きにけり

浜口 佳春

伊賀と甲賀といえは隣国同士で、忍術で名の通った所であつた。その忍者同士に競い合うことがあつただろうか。桜が競い合うように咲いているというのだが、「競う」に作者は何を込めようとしたのだろうか。

〈佳作〉

夫逝きて日永となりし昨日今日

佐藤 雅子

お位牌の三つにひとつ柏餅

富永木綿子

人住むと点りて気付く春の山

中村 真一



誌上句会〈編集部選〉

■三

三味の音を止めて聴き入る青葉騒
森 懐人
疼く齒に一日長かり三鬼の忌
佐藤雅子
三門に満天星の花宵ともす
當間あさ子
春彼岸皿のおはぎの三つほど
早乙女喜栄子
三越で買うてしまいいし金魚かな
斉田 仁
三千世界にぼつりん臍蜜柑
内藤隼人
三振のあとの青空囁れり
笠井亜子
芝青む三橋達也の目尻かな
濱野東人
三昧と称して酩酊の昼
結城慎吾
三枚におろして春の海便り
道端あらた

■緑

初夏の旅ただ懐かしき有縁の地
森 懐人
仏縁を頂き喪の身御忌修す
佐藤雅子
はらはらと縁のさくら文にあり
早乙女喜栄子
春愁に淡き縁どりありにけり
笠井亜子
帽の縁歩いていたり春の蠅
濱野東人
春闌けてとことん乾く縁の下
山口具円
縁側に正座しており目借時
小林苑を
晩春や母の名づけし無縁坂
嘉藤 愛
天空の縁まで花の舞い上がる
長谷川裕
花後に咲く遠縁にあたる花
坂下亜由美

浄土誌上句会のお知らせ

兼題

伝通自由題

締切・二〇一三年六月二十日

発表・『浄土』二〇一三年九月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句(何句でも可)と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-1-7 4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■自由題

花の雨酔いをさますに惜しき道
森 懐人
引導の静かな響き花の雨
飯島英徳
山笑う頑はなき孫幼稚園
當間あさ子
法要に和して背山に囁れり
山崎遣迎子
こでまりの白き妖精こぼれ落ち
早乙女喜栄子
玄関に補助坐る春の家
工藤 掉
落椿避けて椿の落ちにけり
斉田 仁
山吹のざわりと麻酔切れかかる
近 恵
昨年の葉にくるまれし桜餅
山内桃児
春の夢呪文のようにプレスリー
鈴木真理子
オムライスに似て春の墮落かな
笠井亜子
たましいの底に水あり桜葉
長谷川裕

さっちゃんねッ

かまち♡よろう



かまちよろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞)



のろくとも雨を喜ぶ蝸牛

岱潤

先日テレホン相談で受けた電話に、福岡からの若い女性で、「インターネットの話で、今の政府が差別を推進するよう

だが、ひどすぎると思った。インターネットの普及は、情報化社会をとんでもない方向に持って行ってしまっているような気がする。

な法案を考えていて、公明党なども賛成と出ている。私は小さいときから筑豊の在日韓国人の多い地域で暮らしていたため、学校で差別を受け続けてきた。不安で「学校で差別を受け続けてきた。不安でしようがない」というものだった。私は人権委員の立場から「それは全くのでたらめで、そんな法案が出るはずがないし、もし本当だったら、大問題になっていますよ」と答えた。インターネットでよくある話と言ってしまうはそれまで

二年くらい前からブームとなった言葉に「断捨離（だんしやり）」がある。やましたひでこさんがヨガの行法哲学の「断行・捨行・離行からヒントをえて作った片付けの生き方術で、いらぬ情報、なくてもいい物は断ち、使わない物、必要のない物は捨て、物への執着を離れるというもので、主婦層を中心に大ブームとなった。最近でも「私も断捨離始めるわ」を口にする人が多くなってきたような気がする。この「断捨離」仏教用語で

しようと言われる。確かにあつてもいいように思うが、単語としては出てこない。でも禅宗が使う用語に出てきても不思議でない気がする。現代を生きる大事な考え方だ。

（長）

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤光道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十九巻六月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十五年五月二十日

発行 平成二十五年六月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三・三五七八六九四七

FAX 〇三・三五七八七〇三六

振替 〇〇一八・八・八二二八七

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
北山大超(焼津・光心寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(大木山・清浄華院)
脳博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大木山・光明寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

泰雲の

文と写真

浄土真宗東京東本願寺派
光徳寺・平井泰雲尼
茶道歴30年



美味探訪

ピッツァ・サルヴァトーレ

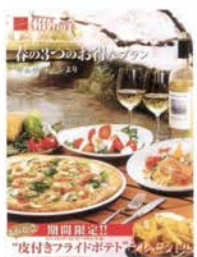
衣更えの季節。1日中衣服の出し入れに追われ食事の支度も外食も難しい。そんな時に美味しいデリバリーは助かります。

今回はデリバリーの『ピッツァ・サルヴァトーレ』の紹介。

日本にナポリピッツァとイタリアの食文化を紹介したグランシェフのサルヴァトーレ・クオモが、ナポリピッツァのコンテストで、日本初のチャンピオンになった大西誠氏を迎え白金台にピッツァを主とする店を出しました。それが「ナポリピッツァの達人」の店として注目され、その後、同じ東京の白金台からデリバリーを始めました。

水牛の乳で作る濃厚なモッツアレラチーズ、無農薬のハーブの食材からなるメニューはクオリティが高く、他の宅配との違いが鮮明に出ます。

そのサルヴァトーレのおすすめはシンプルなマルゲリータ、カブレゼ（モッツアレラとトマトのサラダ）、パンチェッタなど。サラダ類や前菜も豊富で、本場のピッツァに最も近い宅配ピザと言えます。また、季節のメニューのグラタンやリゾットは風邪引きのときに助かっています。



スタッフ一同、笑顔でお持ちしております！

<http://www.salvatore.jp/delivery.html>

（配達可能エリアを確認してから御注文下さい）

【月～金】 11:00～14:30 17:00～23:00

【土・日・祝】 11:00～23:00

新

刊

案

内

関東十八檀林ガイドブック

いまよみがえる関東巡礼の旅



江戸時代に浄土宗僧侶の養成を目的として選定、創建された十八の古刹や名刹がついに一冊の本になりました。単立寺院となった二か寺を含む関東各地の十八の寺院を取材、その歴史から今に伝わるエピソード、さらにお寺巡りや団体参拝に役立つ周辺の見所や食事処、加えて詳細なアクセスマップに各寺院の基本情報も掲載された手元に置いておきたい待望の一冊です。また、巻末には江戸時代に十八檀林参拝の様子を記した撰門の『檀林巡路記』の現代語訳抄も掲載されています。

《十八檀林》
 東京 増上寺 傳通院 幡随院 霊巖寺 霊山寺 大善寺
 千葉 大岩寺 東漸寺 群馬 善導寺 大光院
 茨城 大念寺 常福寺 弘経寺(瓜連) 弘経寺(結城)
 埼玉 浄国寺 勝願寺 蓮馨寺 神奈川 光明寺

発行：関東十八檀林霊場会
 A5版／カラー96頁
 ：800円（税込）

※本誌のお求めは、
 法然上人讃仰会 電話03-3578-6947 Fax03-3578-7036
 または各檀林寺院、浄土宗文化局でもお求めいただけます。